

# 野介代地京遺跡発掘調査報告

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第4集

1977

津市教育委員会

道路改良工事新錦橋押入線  
文化財発掘調査委員会

# 野介代地京遺跡発掘調査報告

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第4集

1977

津山市教育委員会

道路改良工事新錦橋押入線  
文化財発掘調査委員会

## 例　　言

1. 本書は道路改良工事新錦橋押入線文化財発掘調査委員会が同工事に先立つて実施した  
野代地京遺跡発掘調査の報告書である。
1. 調査は津山市から委託を受け、昭和51年8月から翌年2月まで実施した。
1. 本書に使用した方位は磁北である。また、高さは海拔高である。
1. 本書の作成は、淡 哲夫が担当した。

## 目　　次

I	位置と歴史的環境	1
II	調査の経過	3
1.	調査に至る経過	3
2.	調査組織	4
3.	調査経過	5
4.	調査日誌	6
III	遺構・遺物	8
1.	竪穴住居址	8
2.	建物址	8
3.	溝状遺構	9
4.	その他の遺構	10
5.	遺物	10
IV	結語	12

## 図 版 目 次

- PL. 1 周辺主要遺跡分布 (国土地理院発行地形図)  
2 遺構配置実測図  
3 堪穴住居址 (SB 1) 実測図  
4 建物址 (SB 2) 実測図  
5 溝状遺構実測図  
6 遺跡遠景写真 (1. A区・B区 2. D区)  
7 堪穴住居址 (SB 1) 写真 (1. 東南から 2. 北から 3. 断面B-B')  
8 建物址 (SB 2) 写真  
9 溝状遺構写真 (1. SD 1~4, SD 7・8, 2. SD 2・3)  
10 溝状遺構写真 (1. SD 4~6 断面H-H', 2. SD 1 断面B-B',  
3. SD 2 断面E-E')  
11 遺物 (1. 高杯形土器, 2. 銅錢, 3. 扇平片刃石斧, 4. 鉄滓,  
5. D区出土陶磁器)

## 挿 図 目 次

- Fig. 1 遺跡の位置 ..... 1  
2 遺跡周辺の地形 ..... 2  
3 溝状遺構土層断面 ..... 9  
4 SB 1 出土弥生土器 ..... 10  
5 B区出土扇平片刃石斧 ..... 11

# I 位置と歴史的環境

中国地方は、南に瀬戸内海、北に日本海に挟まれ、そのやや北よりには、概ね標高 1,000 m 前後の中国山地が東西に長く横たわっている。この中国山地から南北に大小の河川が流れ、それぞれの海に注ぐ。これらの河川流域には、小冲積平地が発達し、水稻耕作の安定した生産基盤を提供している。中国地方の東端に位置し、標高 735 m の人形峠付近に源を発し、津山盆地に流れ込む水を集めながら、瀬戸内海に注ぐ河川が吉井川である。野介代地京遺跡は、この吉井川と阿波村から流れきった加茂川が合流する地点の北約 2.5 km にある。(Fig. 1)。遺跡の位置する加茂川と吉井川の一支流宮川との間に挟まれた地域は、中国山地南麓から派生する標高 120 m から 220 m 程の南北に細長く延びる低丘陵とそれらの丘陵間の狭長な谷とから構成されている。それらの一つに、津山市大篠瀬ノ内池付近に始まり、津山市柳保、野介代を通って、吉井川と宮川との合流部にむかって長軸状に延びる丘陵がある (PL. 1)。このうち、津山市志戸部と野介代の字標にあり、地京池西の標高 135 ~ 140 m の丘陵上に位置するのが本遺跡である (Fig. 2)。その行政区画は、岡山県津山市野介代 125 番地である。

吉井川と加茂川との合流点周辺の地域には、弥生時代以来、人々の継続的な足跡が刻まれている。弥生前期の山北一丁田遺跡<sup>(1)</sup> (PL. 1-2)、中期集落遺跡としての沼弥生住居址群<sup>(1)</sup> (PL.



Fig. 1 遺跡の位置

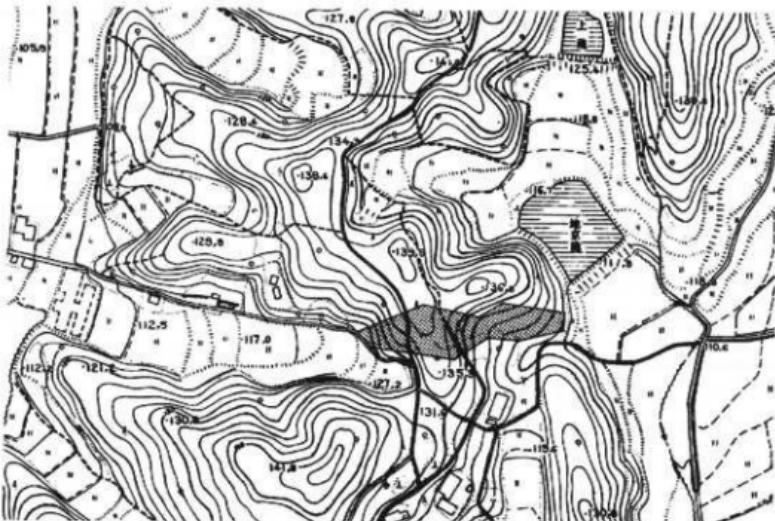


Fig.2 遺跡周辺の地形 (S=1:4,500)

1-3)・押入西遺跡<sup>(3)</sup>・PL. 1-5)・素保井遺跡(PL. 1-7)などが知られ、後期には、総社内山遺跡(PL. 1-8)・沼京原遺跡(PL. 1-12)・大田十二社遺跡(PL. 1-13)などの集落遺跡とともに、下道山遺跡<sup>(4)</sup>(PL. 1-9)・椎現山遺跡(PL. 1-10)・上原遺跡(PL. 1-11)などの埋葬遺跡が調査されている。古墳時代も濃密な遺跡分布のあり方を示している。すなわち、前期古墳として日上天王山古墳(PL. 1-15)・正仙塚古墳(PL. 1-16)・井口車塚古墳(PL. 1-18)・国分寺飯塚古墳(PL. 1-17)などがあり、後期には玉林大塚古墳(PL. 1-25)・大野木塚古墳(PL. 1-26)などの首長墳とともに、川崎六ツ塚古墳群(PL. 1-24)などの群集墳が数多く形成される。律令時代には、美作国府<sup>(5)</sup>(PL. 1-27)が宮川左岸の段丘上に置かれ、吉井川と加茂川との合流点東南東の台地には、美作国分寺(PL. 1-28)と国分尼寺(PL. 1-29)が相ついで造営された。

廿

- (1) 桥月壮介・近藤義郎「津山市山北一丁田遺跡」(近藤義郎・渋谷泰彦編著『津山弥生住居址群の研究—西地区—』1957, 所収)
  - (2) 近藤義郎・渋谷泰彦前掲書
  - (3) 岡山県教育委員会「岡山県埋蔵文化財発掘調査報告3」1973)
  - (4) 岡山県教育委員会「下道山遺跡緊急発掘調査概報」1977)
  - (5) 岡山県教育委員会「美作国府」(『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告6』1973, 所収)

## II 調査の経過

### 1. 調査に至る経過

昭和49年7月、津山市建設部から市教育委員会に新錦橋～押入線道路新設改良工事にかかる埋蔵文化財の取扱いについて照会があった。これを受けて、市教委は同年12月と翌年2月に同路線の分布調査を行ない、次のような調査結果を得た。

- (1) 野介代尾鼻工区の南西に周知の遺跡である野介代尾鼻遺跡があるが、当工区もそれと同一の丘陵上にあるので、遺跡の範囲に含まれる可能性が濃いこと。
- (2) 野介代三反田遺跡は、遺跡地図に記載されているものの、すでに美作合地開発事業による造成が完了しており、遺跡は消滅していること。
- (3) 高野地区条里遺跡は、保存状況確認のための調査を必要とすること。
- (4) 周知の遺跡以外で野介代地京地区、高野山西地区については、地形、周囲の遺跡の分布状況等から推して、遺跡の存在する可能性が濃いこと。

以上の確認に基づき、昭和50年7月に市教委は市建設部に野介代地京地区、野介代尾鼻地区、高野山西地区、高野条里地区について、埋蔵文化財確認調査を実施する必要がある旨回答した。そして、上記のうち工期の遅れる高野条里地区を除く3地区について、市建設部からの事務委託を受けて市教委が埋蔵文化財確認調査を実施した。

確認調査は、昭和50年12月3日から翌年1月17日まで実施された。発掘面積は1,411m<sup>2</sup>である。発掘は丘陵尾根と平行ないし直交するような幅約2mのトレーナーを設けて行なった。以下、市教委による確認調査の各地区毎の概要を記す。

**野介代地京地区**　調査期間12月3日～12月12日。発掘面積544m<sup>2</sup>。中央の浅い谷の西側丘陵頂部から東斜面にかけて、幅0.4～2.8mの大小の溝状遺構6箇所を検出した。これらの遺構は、検出のみにとどめ、その発掘はさけた。出土遺物は表土層からの扁平片刃石斧1個と鉄滓2個のみであった。石斧の出土から推して、これらの遺構は主として弥生時代中期に属するのではないかと考えられた。また、谷の東側丘陵斜面には幅約13mの平坦面があり、そこに東西に一列に並ぶ5箇所の柱穴を検出した。これらは建物址の一部と推定されたが、やはり検出のみにとどめた。柱穴付近の表土層から備前焼など若干の土器片が出土した。

**野介代尾鼻地区**　調査期間12月12日～1月15日。発掘面積717m<sup>2</sup>。本地区は地京地区的東約600mで、谷を隔てた対岸にある。丘陵頂部とその東西の斜面からなるが、東斜面が急であるのに対し、西斜面は緩やかである。遺構は丘頂には存在せず、東西斜面に検出されたが、と

くに西斜面に集中した。すなわち、西斜面で土壌墓10数基、性格不明の土塁3箇所、柱穴4箇所、その他1箇所が検出された。土壌墓は2基を発掘した。どちらも、径1.2m、深さ1.2mで、中から硯、キセル、毛抜、鉄釘などが出土した。時期は江戸時代と思われる。東斜面では径1.0m、深さ1.0m程の円形プランの土壌墓2基を検出した。遺物は存在しなかったが、形態は西斜面のそれと同様である。その他、遺構に伴なわずに皿、茶碗、擂鉢等陶磁器が出土した。このように、尾鼻地区には遺構がかなり密に検出されたものの、これらは概ね江戸時代頃のものと認められた。

**高野山西地区** 調査期間 1月15日～1月17日。発掘面積 150m<sup>2</sup>。本地區は正仙塚古墳の南約400mの丘陵上にある。調査の結果、遺構・遺物は認められなかった。

以上の確認調査結果に基づき、昭和51年3月、市教委は市建設部に埋蔵文化財の取扱いについて次のような要請を行なった。

(1)、野介代地京遺跡は、溝状遺構・建物址などを含む弥生時代中期を中心とする遺構が存在するので、現状変更が必要な場合は、発掘調査を行なう必要があること。

(2)、高野地区条里遺跡については、今回確認調査を行なっていないので、工事に際しては、遺存状況確認のための調査を行なう必要があること。

そして、市教委と市建設部で協議された結果、高野地区条里遺跡については、工期が遅れるので将来のこととし、野介代地京遺跡について、発掘調査による「記録保存」を行なうこととされたのである。

## 2. 調査組織

岡山県教育委員会と津山市教育委員会の関係職員からなる道路改良工事新館橋押入線文化財発掘調査委員会が主体となり、津山市から調査委託を受けて、発掘調査を実施した。委員会の構成は次のとおりである。

役名	氏名	所属
委員長	森川 正利	津山市教育委員会教育次長
副委員長	西口 秀俊	岡山県教育厅文化課参事
同上	光岡 鉄郎	津山市教育委員会社会教育課長
委員	光吉 勝彦	岡山県教育厅文化課文化財二係長
同上	須江 尚志	津山市教育委員会社会教育課文化係長
同上	葛原 克人	岡山県教育厅文化課文化財保護主査
同上	河本 清	津山市教育委員会社会教育課文化財保護主査

役名	氏名	所	属
事務局長	光岡 鉄郎	津山市教育委員会社会教育課長	
事務局次長	須江 尚志	同	社会教育課文化係長
事務局員	湊 哲夫	同	主事
同上	杉 烟 操	同	事務員

### 監 事

役名	氏名	所	属
監事	水田 桂	岡山県教育庁文化課主幹	
同上	谷名 通良	津山市教育委員会社会教育課長補佐	

### 調査団

役名	氏名	所	属
調査団長	河本 清	津山市教育委員会社会教育課文化財保護主査	
調査員	伊藤 児	岡山県教育庁文化課文化財保護主事	
同上	栗野 克己	同	上
同上 〔現場担当〕	湊 哲夫	津山市教育委員会社会教育課主事	

### 3. 調査経過

調査対象地は、道路路線の関係上、南北15~35m、東西165mの細長い帯状を呈し、南北方向の丘陵を横断する形となっている。対象地の中央には、小さな谷が入り込んでおり、そこをC区とした。谷の西側の丘陵は、南北道路によって切断されているので、その道路の西側をA区、道路と谷との間をB区とした。さらに、谷の東側の丘陵をD区とした。D区はA・B区のある南北方向に延びる丘陵から東へ派生する丘陵の南斜面にあたる。発掘にあたっては、道路工事用の東西センターラインを基準として、調査区全域に10m単位の方眼を設定し、その南北軸をA~Oのアルファベット、東西軸を1~5の数字で表わした。また、個々の単位区は、西北隅の地点記号で表示した。C区はトレント調査にとどめ、他の地区はほぼ全面を発掘した。調査面積は2356m<sup>2</sup>である。発掘は排土の都合上、C区から行なった。

C区は1.5~2mの厚い堆積土で覆われた小さな谷で、そこに2箇所のトレンチを設けた。発掘面積24m<sup>2</sup>。遺構は検出されず、堆積土から備前焼・瓦質土器、鉄釘などの遺物が出土した。調査の結果、遺構は存在しないと判断されたので、これ以上の調査区の拡張をしなかった。次にD区の発掘に着手したが、道路工事の都合上、A・B区を急ぐよう要請されたので、A区の調査に移行した。A区は丘頂を中心に発掘したが、遺構・遺物は認められなかった。調査面積

205 m<sup>3</sup>。次にB区に移り、東斜面の裾部から丘頂にかけて遂次排土を行なった。調査面積 984 m<sup>2</sup>。B区では丘頂平坦部に尾根と平行して大小の溝8条、東斜面肩部に堅穴住居址1棟を検出した。最後にD区の発掘を行なった。発掘面積 1,143 m<sup>2</sup>。D区中央には調査前から幅約13mの平坦部が認められたが、発掘するとそこに高さ約1.6mの崖が現われた。遺構はこの平坦面上に造られており、掘立柱建物址1棟などを検出した。先の崖は当初、建物を築く際の整地によるものと考えたが、最後に崖を断ち切ったところ、自然現象により形成されたことが判明した。

#### 4. 調査日誌（昭和51年8月27日～昭和52年2月16日）

- 8・27～9・7 調査区の草刈り。
- 8・30～31 現場小屋設置。
- 9・2～7 業者に委託して地形測量を行なう。
- 9・7 C区にトレーニチを設けて、発掘を開始する。
- 9・16 C区のトレーニチの排土。トレーニチから備前焼など出土。D-M 3区の発掘に着手。M 3区から寛永通宝1個出土。
- 9・17 C区のトレーニチの排土。M 3区の排土。工事の都合上A・B区の発掘を急ぐこととなったので、D区をあとまわしにして、A-C 2区の排土を行なう。
- 9・21 B 2区の排土。
- 9・24～27 C区トレーニチの精査。B 1・B 2区の排土。
- 9・28 C区トレーニチの実測。B 1区の精査。B-H 3区の発掘開始。
- 10・1 C区トレーニチの写真撮影を行ない、C区の発掘終了。B 1・B 2・C 2区の精査。A区の写真撮影を行なって、A区の発掘終了。H 3・G 2区の精査。G 3区の排土。
- 10・5 G 3・G 4区の排土。
- 10・13 F 2・F 3・E 2区の排土。F 2区で溝状遺構検出。またこの区から弥生土器出土。
- 10・15 F 2・F 3区の精査を行ない、先の溝状遺構の検出に努める。その結果、それが堅穴住居址(SB 1)と判明。F 1・F 4区の排土。
- 10・16 F 1・F 4区の排土。F 3区の精査。
- 10・19 F 1区の排土。
- 10・22 F 4区の精査。E 2区の排土。
- 11・9 SB 1の発掘。E 2区を精査し、溝状遺構 SD 1を検出。
- 11・26 SB 1の土層断面実測。溝状遺構 SD 1・2の発掘。D-M 2区の発掘開始。
- 11・29 SD 1の発掘。遺物なし。M 2区の排土。
- 12・3 SD 1の土層断面の実測。
- 12・7 前回に続き SD 1土層断面の実測。あわせてその写真撮影を行なう。M 2区の排土。

- 12・10 S B 1 の上層断面の補足実測。N 3 区の排土。
- 12・20 調査委員会開催。強風のため写真撮影用のタワーが倒れる。人身事故なく幸い。
- 12・21 S D 1・4・5・6 の実測。
- 12・26 S B 1 の断面実測を試みるが、谷から吹き上げる強風のため実測困難。
- 12・28 強風をおして S B 1 の実測を行なう。本日で B 区の発掘終了。
- 1・8 M 1・M 2 区の排土。A・B 区の造成工事開始。
- 1・10 M 1・M 2 区の排土。
- 1・13 M 1 区の排土。M 2・M 3 区の精査。M 2 区で柱穴 3 箇所を検出する。
- 1・14 M 1 区の排土。M 2 区からの崖はさらに北東に続く、M 3 区の精査。
- 1・15~18 N 2 区の排土を行ない、掘立柱建物 S B 2 の全容を検出。ただちに柱穴の発掘。
- 1・19 P 3 区の排土。
- 1・20 P 3・O 2 区の排土。崖の土層断面の検討。
- 1・22 崖土層断面の写真撮影。P 3 区の精査。O 1・O 2・P 2 区の排土。
- 2・2 N 2 区で新たに小柱穴 2 箇所検出。S B 2 の実測。P 2・L 2 区の排土。
- 2・8 S B 2 の写真撮影。K 1 区の排土。
- 2・12 崖の断ち割り調査。この崖は自然に形成されたことが判明。発掘終了。
- 2・16 発掘器材・出土遺物などを作業小屋から収集。

### III 遺構・遺物

#### 1. 穹穴住居址 (PL. 3・7)

穹穴住居址 SB 1は、B区の丘陵東縫部にある。SB 1付近の層位は、厚さ約10cmの黒褐色表土の下に厚さ約10cmの黒褐色粗砂質土があり、さらに、その下に厚さ約15cmの橙褐色粗砂質土がある。この橙褐色土の下が地山となっており、SB 1はこの地山を切り込んで造られている。SB 1検出面から床面までの深さは40~50cmで、SB 1埋土は、主として黒褐色細砂質土と黄褐色細砂質土とからなっている。

SB 1のプランは、隅丸方形で東半分が削り取られている。現存する部分での南北長は5.0mである。壁はかなりの法を有するが、一部にオーバーハングしている箇所もある。現存する部分の隅付近の壁ぎわに周溝があるが、中央部にはない。周溝はU字溝で幅10~15cm、床面からの深さ約5cmを測る。柱穴は4箇所検出した。1は38cm×27cmの楕円形のピットで、床面からの深さ52cmを測る。2は径30cmの円形で、深さ57cm。3は円形で、径23cm。上部がかなり削り取られているが、床面からの深さを復元すると69cmとなる。4は円形で径25cm、検出面からの深さ24cmを測る。これらのうち、1・2が主柱と考えられ、それらに対応すべき東側の柱穴は削り取られているものと思われる。従って、SB 1は4本柱の住居と推定されるのである。3は支柱であろう。4は住居址の東南隅に位置すると復元されるが、SB 1に伴なうかどうかわからない。柱の間隔は、1と2が223cmである。5はSB 1のほぼ中心にあると推定される中央穴である。円形で、上面が若干削り取られており床面からの深さを復元すると26cmとなる。SB 1の西北隅の周溝外側に、床面より一段高いテラス状の施設がある。

ピット1の北の床面直上で、高杯形土器1個体が出土した。また、ピット4埋土からは2点の弥生土器細片が出土した。さらに、SB 1埋土中から若干の弥生土器細片が出土した。これらの上器は、いずれも弥生時代中期後半の特徴をそなえており、SB 1の時期もほぼその頃と考えられる。

#### 2. 建物址 (PL. 4・8)

丘陵南裾部のD区中央に、東北方向に続く高さ約1.6mの自然崖があり、その東南側が幅約13mにわたって平坦面となっている。建物址SB 2は、この平坦面上にある。この付近の層位は、厚さ約20cmの表土の下に厚さ約20cmの暗褐色細砂質土があり、その下が地山となっている。SB 2は、この地山面上で検出された。

S B 2は桁行4間、梁間2間の掘立柱の東西棟建物である。すべての柱筋に柱をもつ。東西9.2m、南北4.0mを測る。柱の並びは整然としない。柱穴は円形ないし楕円形で、径30~50cm、深さ10~20cm程度である。深さが非常に浅いのは、上部が削り取られているためと思われる。北側柱西第2柱穴、南側柱西第3柱穴、及び建物中心にある柱穴を除く12箇所の柱穴で柱痕を検出した。柱痕の直径は12~20cmである。柱間は桁・梁両方向とも不揃いである。桁方向では、おむね210cm前後であるが、東第1柱筋と第2柱筋の間隔が260cm前後とかなり広くなっている。梁方向では、北柱間が200~230cm、南柱間が160~185cmで、後者がかなり短い。建物の構造は判然としないが、梁方向の南柱間が短いので、あるいは1間×4間の身間に南廻がつくものとも考えられる。

柱穴からの出土遺物はない。建物の時期も判然としない。

### 3. 溝状遺物 (PL. 5 • 9 • 10, Fig. 3)

B区の丘陵頂部は、幅約15mにわたって平坦面を呈しており、その部分に大小8条の溝状構が検出された。この付近の層位は、厚さ10~15cmの表土の下がただちに地山となっており、溝状遺構はこの地山上で検出された。これらは、ほぼ丘陵に平行して造られている。

S D 1は、ほぼ直線の南北溝で、南でS D 4に合流する。全長17.4m、幅30~145cm、深さ32~49cmを測る。出土遺物はない。

S D 2は、S D 1の西にあるやや湾曲する南北溝である。全長26.8m、幅40~115cm、深さ15~22cmを測る。出土遺物はない。

S D 3は、S D 2の西にある少し蛇行する南北溝で、一部分二股となっている。全長21.7m、幅60~85cm、深さ9~14cmを測る。出土遺物はない。

S D 4は、S D 1に南接する「く」状の南北溝で、南はさらに調査区外に続く。検出部分の

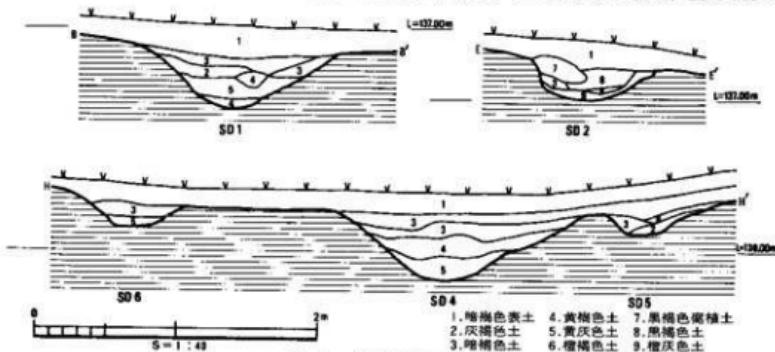


Fig. 3 溝状遺構土層断面

長さ 13.0 m、幅 105 ~ 200 cm、深さ 35 ~ 48 cm。底から鉄滓 1 個が出土した。

S D 5 は、S D 4 に東接する南北溝で、南は調査区外に続く。検出部分の長さ 175 cm、幅 60 cm、深さ 17 cm。出土遺物はない。

S D 6 は、S D 4 の西にある南北溝で、南は調査区外に続く。検出部分の長さ 450 cm、幅 50 ~ 75 cm、深さ 20 cm。出土遺物はない。

S D 7 は、S D 1 に東接する小南北溝である。南で S D 1 に合流すると思われるが、その部分が削られている。現存部分の長さ 520 cm、幅 50 cm、深さ 10 cm を測る。出土遺物はない。

S D 8 は、S D 7 に北接する小南北溝である。全長 550 cm、幅 35 ~ 50 cm、深さ 10 cm。出土遺物はない。

以上の溝状遺構からの出土遺物は、鉄滓 1 個のみであり、遺構の時期は不明である。また、これらの遺構の性格も判然としない。

#### 4. その他の遺構 (PL. 2)

D 区で土壌と柱穴を検出した。S X 1 は、2 m × 1 m 程の不定形の土壠である。深さ 2 cm。出土遺物はない。大半を削平された状態の何かの基底部であろうか。S B 2 の東と南で合計 6 箇所の柱穴を検出した。掘り方は円形で、径 20 ~ 50 cm、深さ 9 ~ 59 cm を測る。出土遺物はない。これらの柱穴は、建物としてまとまらない。

#### 5. 遺 物 (Fig. 4・5, PL. 11)

遺物は B・C・D の各区から出土した。主な遺物は、弥生土器、石斧、備前焼、銅錢、鉄滓であるが、全体として出土量は少なく、遺構に伴う遺物もごくわずかである。

Fig. 4 は S B 1 出土の弥生土器である。1 はビット 1 北の床面直上から出土した高杯形土器である。脚部下半を欠く。口縁部径 267 mm、脚部最少径 55 mm、杯部高さ 75 mm を測る。脚部は細く、杯部は大きく外反し、口縁端部が外方に拡張する。器壁は脚部で厚く、杯部で薄い。杯部と脚部の接合は円盤貼り付けによる。脚部外面に横方向の沈線が施さ

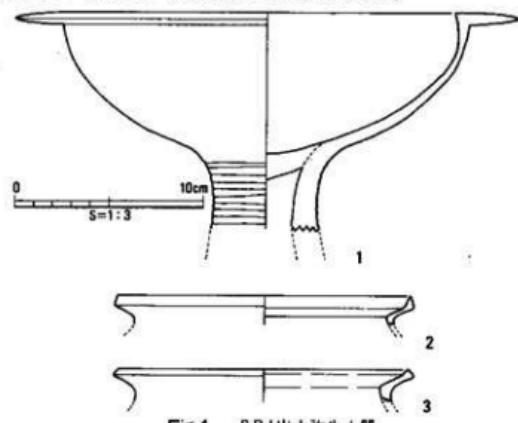


Fig. 4 S B 1 出土弥生土器

れている。器表内外面は剥離が著しく、調整痕跡は観察できない。色調は黄褐色を呈し、胎土には2mm位の砂粒が少數含まれる。2・3はSB1埋土出土の壺形土器の口縁部破片である。口径はどちらも160mm位であろう。2は「く」字状口縁を呈し、その口縁端が上方に少し拡張する。器壁は薄い。外面は横なで、内面はヘラみがきが施されている。薄い褐色を呈し、胎土は細かい砂粒を多く含む。3も「く」字状口縁を呈し、口縁端が上方にわずかに拡張する。調整は内外面とも横なでである。2・3とも外面にススが付着している。以上の土器はいずれも弥生時代中期後半の特徴をそなえている。SB1からは他にも弥生土器の細片若干が出土している。

Fig. 5はSB1付近の表土層から出土した扁平片刃石斧である。長さ57mm、幅26mm、厚さ8mmを測る。片面はよく研磨されているが、他の面は刃部を除き研磨は入念でない。刃部に使用痕が認められる。石質は緑色片岩である。

PL. 11-5はD区から出土した備前焼など中世以降の陶磁器片、PL. 11-4はB区表土層出土の鉄滓である。また、PL. 11-2はD-M3区出土の銅銭である。「寛永通宝」の銘がある。1.8g。

他にB区から鉄鎌1振、灯明皿1個、SD4底から鉄滓1個、C区から須恵器、備前焼、瓦質土器、鉄釘などが出土した。



Fig. 5  
扁平片刃石斧

## IV 結語

野介代地京遺跡は、標高140mの南北丘陵とそこから東北に派生する支丘陵を中心に拡がっていると推定される。今回、発掘調査を行なったのは、その南よりの道路工事にかかる東西に細長い地区である。このように、調査を行なったのは遺跡のごく一部と思われ、また、調査により検出された遺構は、竪穴住居址1棟、掘立柱建物址1棟、溝状遺構8条などわずかである。覚って、今回の調査によって遺跡の全体を推し量ることは困難である。ここでは、今回検出された遺構について若干の整理を行なうことにとどめたい。

SB1は弥生時代中期後半の竪穴住居址である。1棟検出されたのみであるが、これは調査区の制約によるものであろう。恐らく主として北に拡がる集落跡の一部と判断されるのである。なお、B区丘陵頂が平坦な地形となっており、人為的な削平を受けているものとするならばもとこの部分にも住居址などが存在したのかも知れない。

SB2は掘立柱建物址である。時期は明らかにしえなかった。しかし、D区出土の遺物が中・近世の時期のものに限られていることは、消極的ではあるが、SB2の時期も中・近世と推定することも可能である。SB2は桁行4間、梁間2間の縦柱の建物址であるが、これと類似した建物は岡山県北に若干の調査例がある。すなわち、北房町谷尻遺跡5区No.9建物址は、桁行6間、梁間2間の縦柱建物址である。この建物址はNo.8建物址と方位を同じくしており、その柱穴内より11世紀末葉の宋銭が出土していることから、No.9建物址も同様の時期と考えられる。<sup>(1)</sup>勝央町平遺跡東尾根部建物Iは、桁行3間、梁間2間の縦柱建物址である。時期は中世と推定されている。<sup>(2)</sup>津山市二宮遺跡岡の丸B地区No.39建物址は、桁行3間、梁間2間の縦柱の建物址である。時期は中世後期と推定されている。<sup>(3)</sup>これらはいずれも梁間2間で桁行3間以上の縦柱建物で、時期はすべて中世に含まれる。しかし、以上の資料のみから、それらの建物址と時期も群構成も明確でないSB2とを直接結びつけることは困難である。従って、ここでは単に建物構造の類似点のみを指摘しておく。

溝状遺構は丘陵尾根に平行して大小8条検出された。遺物はSD4から鉄錠1個が出土したのみである。これらの遺構については、時期、性格ともに明確にしがたい。

### 註

- (1) 岡山県教育委員会「谷尻遺跡」(『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告11』1976), 第55図
- (2) 同 上 「平遺跡」(『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告8』1975), P. 140~143
- (3) 同 上 「二宮遺跡」(『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告28』1978), P. 118~119

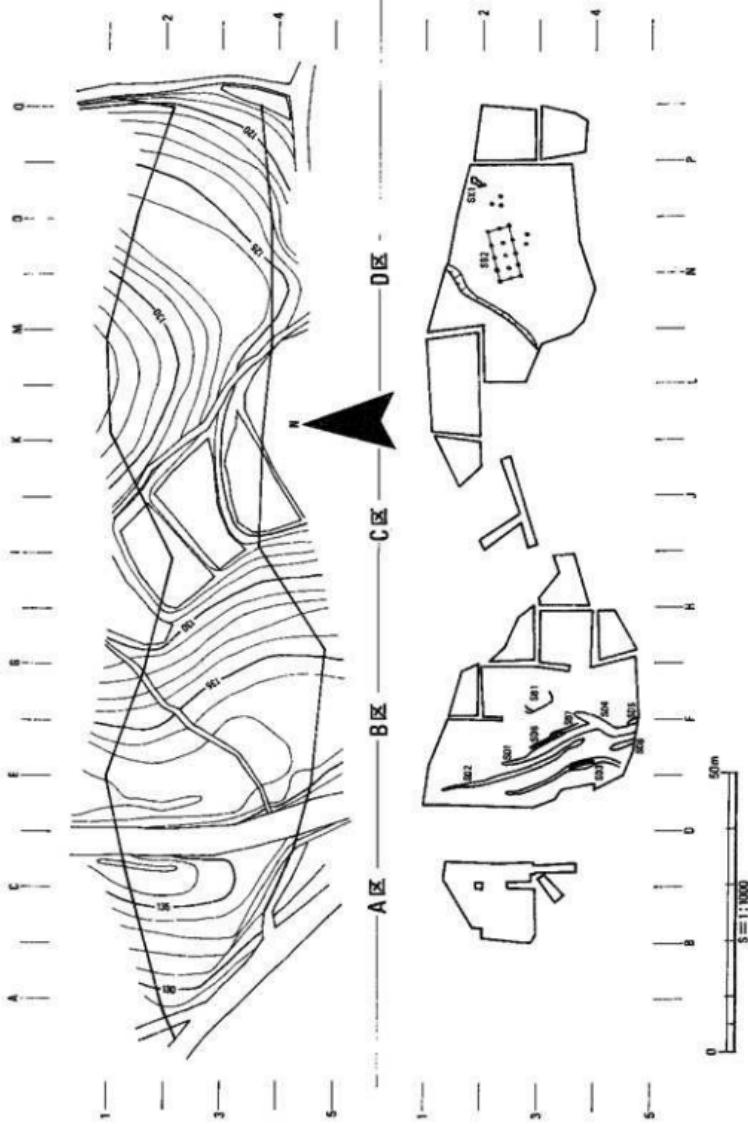
# 図 版

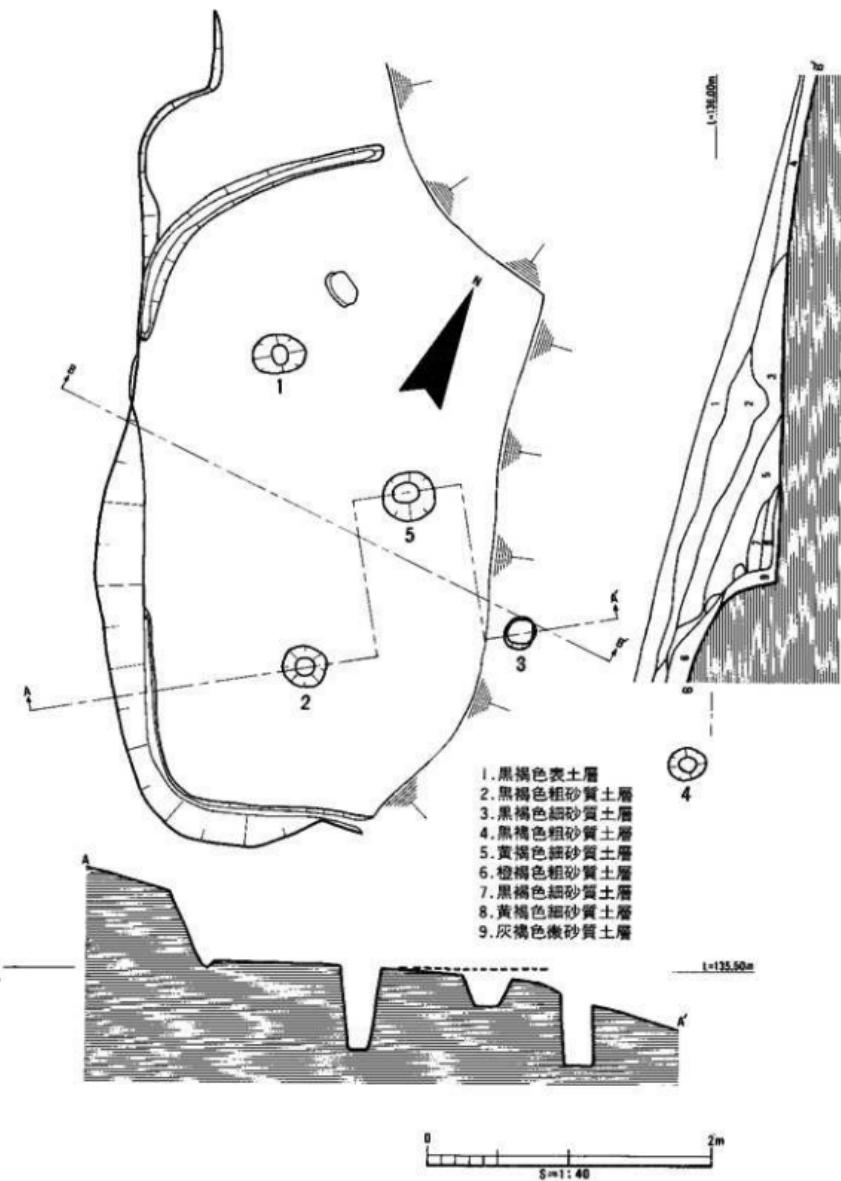


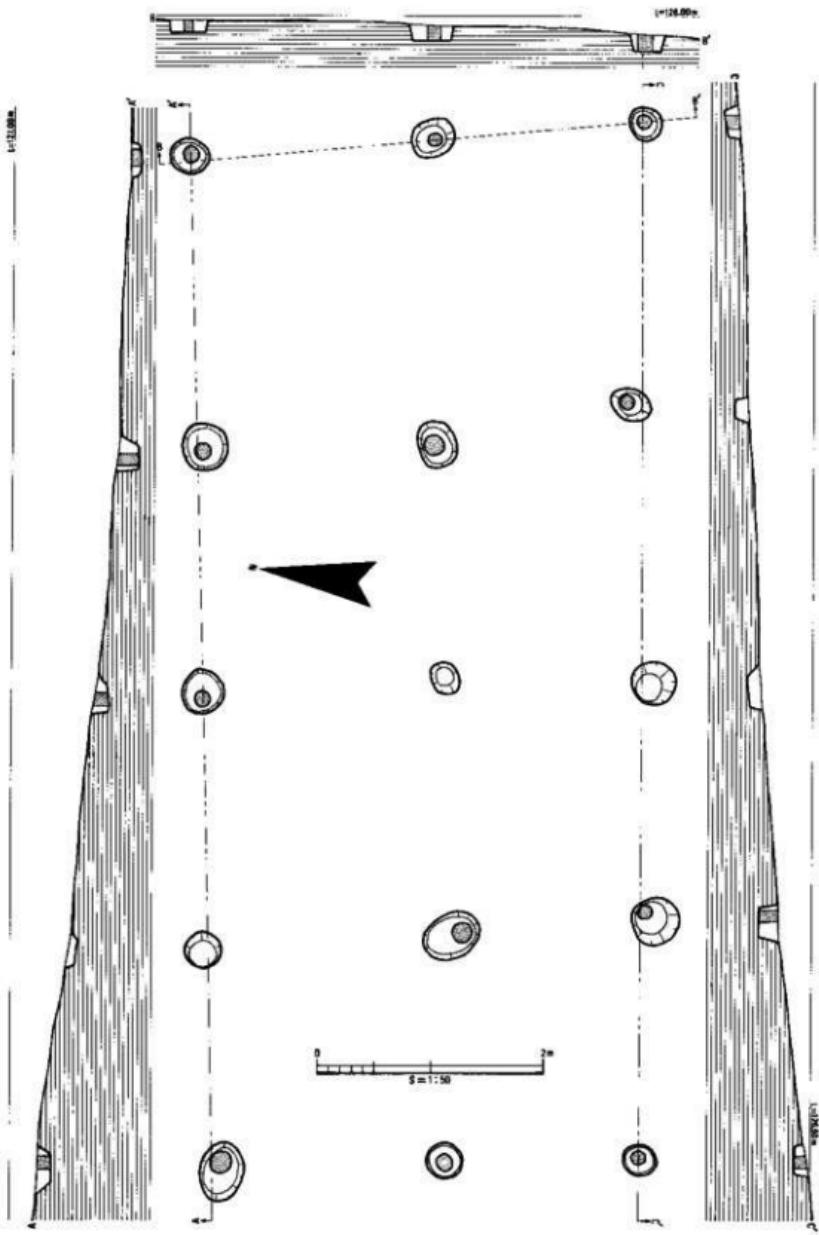


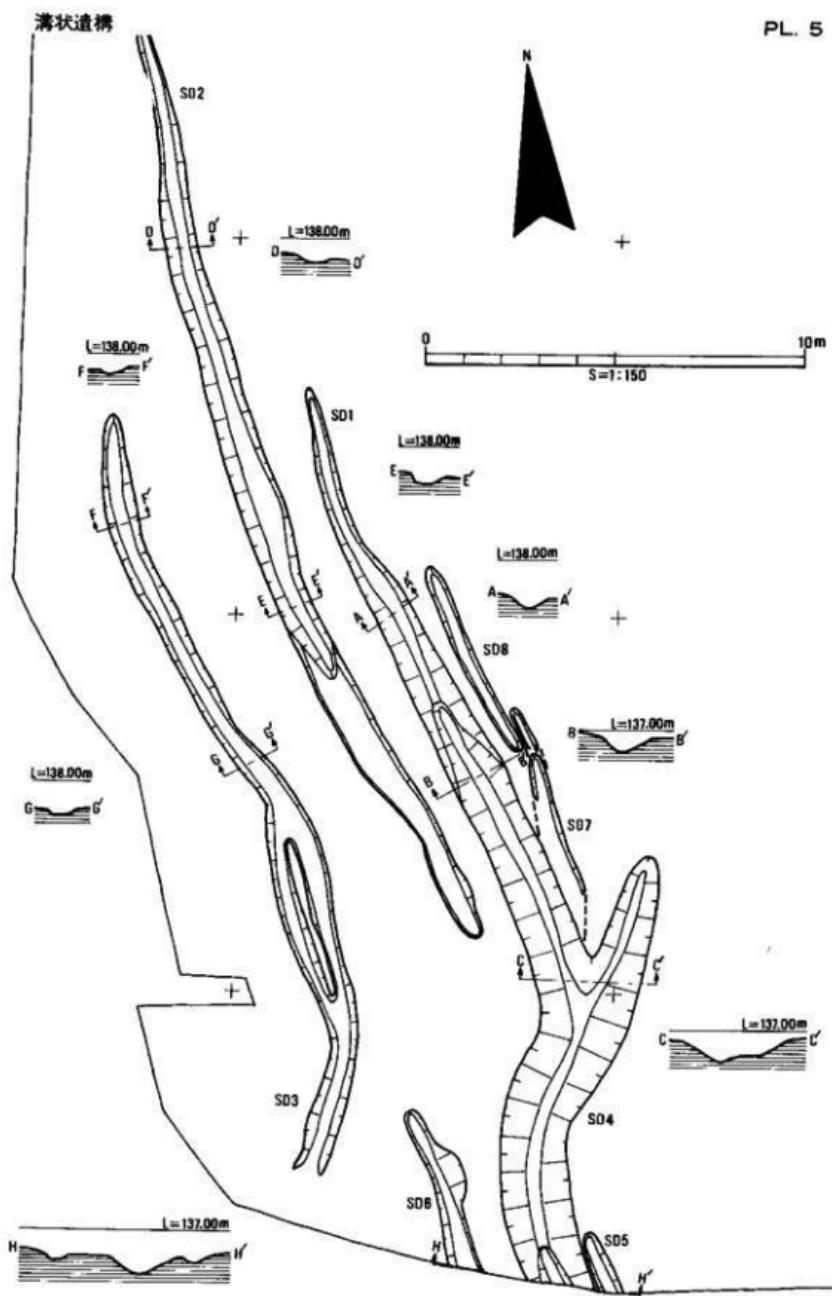
S = 1 : 50,000 (国土地理院発行 5万分の1 地形図「津山東部」及び「津山西部」を複製)

- |            |           |             |              |             |
|------------|-----------|-------------|--------------|-------------|
| 1. 野介代地京遺跡 | 7. 紫保井遺跡  | 13. 大田十二社遺跡 | 19. 瓜生原小原古墳  | 25. 玉琳大塚古墳  |
| 2. 山北一丁田遺跡 | 8. 銚社内山遺跡 | 14. 天神原遺跡   | 20. 八出覗山遺跡   | 26. 大野木塚古墳  |
| 3. 沼弥生住居址群 | 9. 下道山遺跡  | 15. 日上天王山古墳 | 21. 十六夜山古墳   | 27. 美作國府跡   |
| 4. 沼E遺跡    | 10. 僧現山遺跡 | 16. 正仙塚古墳   | 22. 沼古墳群     | 28. 美作國分寺跡  |
| 5. 押入西遺跡   | 11. 上原遺跡  | 17. 国分寺坂塚古墳 | 23. 日上歛山古墳群  | 29. 美作國分尼寺跡 |
| 6. 金井別所遺跡  | 12. 沼京免遺跡 | 18. 井口車塚古墳  | 24. 川崎六ツ塚古墳群 | 30. 夜半庵寺    |







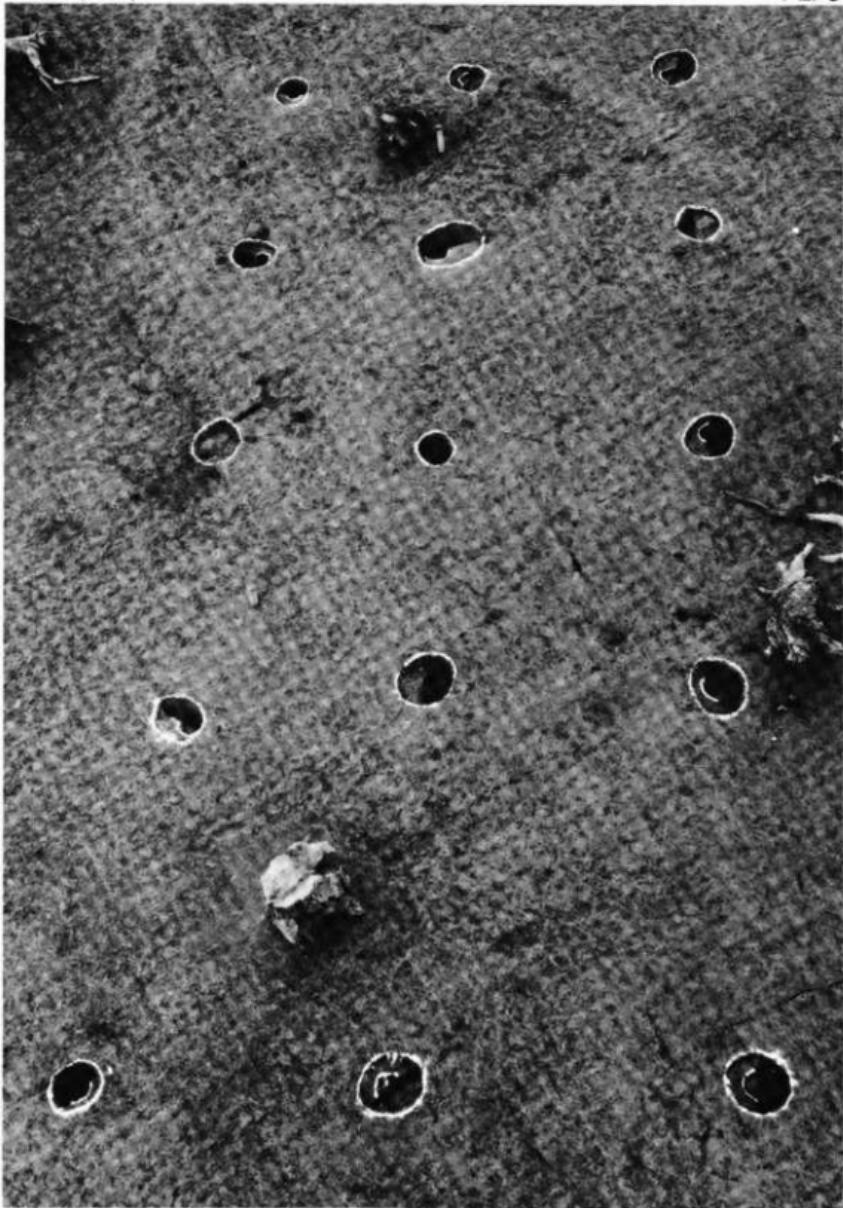




1. A区・B区（西から） 2. D区（東から）



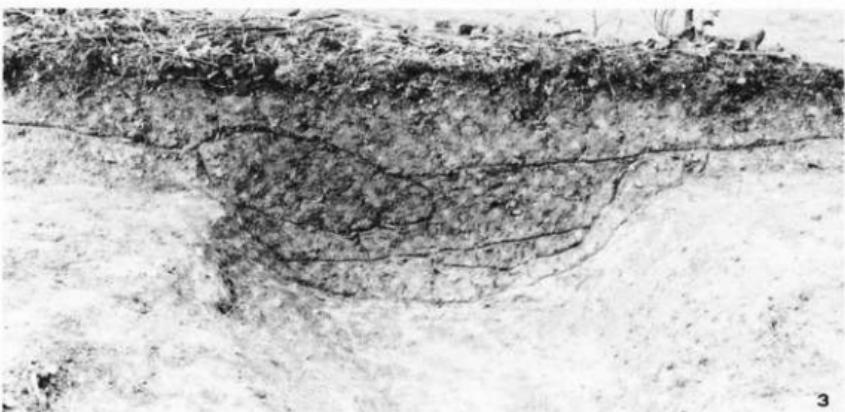
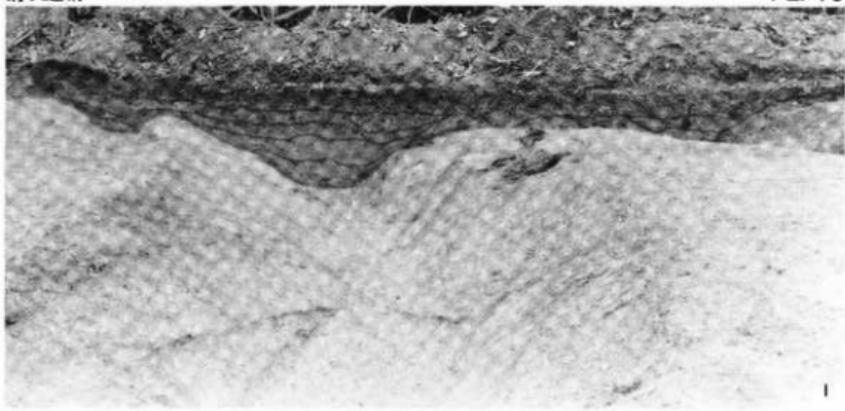
1.東南から 2.北から 3.断面B-B'



東から



1. S D 1 ~ 4 , S D 7 + 8 (南から) 2. S D 2 + 3 (南から)



1. SD 4 ~ 6 (断面H-H'.北から) 2. SD 1 (断面B-B'.南から) 3. SD 2 (断面E-E'.南から)



1



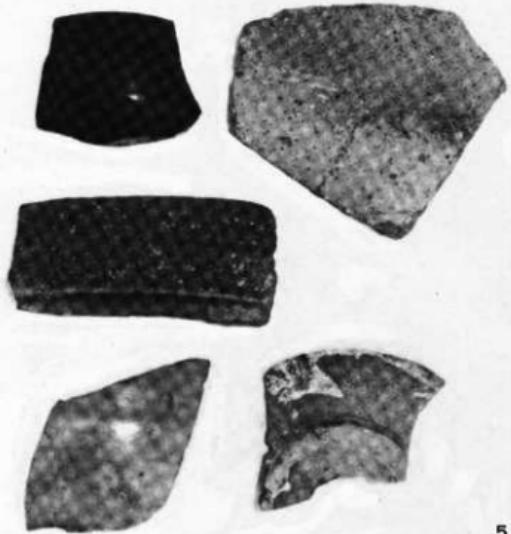
2



3



4



5

1.高杯形上器 2.銅錢 3.扁平片刃石斧 4.鐵滓 5.D区出土陶磁器

野介代地京遺跡発掘調査報告

津山市埋蔵文化財発掘調査報告第4集

1977年3月31日発行

発行 津山市教育委員会  
道路改良工事新錦橋押入線  
文化財発掘調査委員会  
岡山県津山市山下97番地の1

印刷 美作印刷工業株式会社  
岡山県津山市二階町57